

わたしと弟

味噌村 幸太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

知的障がい者の弟をもったあけみ。

あけみはいつも弟のさとの世話をしていた。

そんなとき、さとるを助けるために自ら事故に巻き込まれて、
自分も身体障がい者になってしまったのだ。

その時、姉弟の絆は誰よりも強く結ばれるのだった。

絵本の原作用に書きました。

イラストは遅くなると思いますが、いつかあげたいです。

※またこの作品は障がい者の兄弟児の苦しみを扱っております※
人によっては不快な気分になるかもしれません。

アクセスする際は十分、注意されてください。

目次

きょうだい児のお話

1

私の名前はあけみ。

小学5年生。

友達もたくさんいて毎日楽しい。

学校のお友達はみんな私に優しくしてくれて、恵まれていると思うの。

2

でも、一つだけ私にも悩みがあるの。

それは私の弟、さとるのこと。

別にさとるが嫌いなんじゃない。

さとるは生まれつき、障がい者なの。

知的障がいっていう。

今年で8歳なんだけど、知能としては3歳ぐらいかな？

支援学級に通っている。

3

だからお母さんに言われて、いつもさとるの面倒は私がよく見ている。

小学校に連れていくのもわたし。

別にいいんだけど、さとるの行動は長年一緒に育った私でも予想がつかないの。

急に大声で「うんち！」とか「おしりだ！」とか叫んだりする。

だから、小学校でもクスクス笑われたりする。

お姉ちゃんの私はいつも変な目で見られる。

4

なんでさとるは他の弟と変わっているんだろう。

いつもそう思う。

神様がいるなら、さとるを私と同じように普通の子供に治してほしい。

そしたらもっと私と笑える気がするの。

ゲームだってマンガだって一緒に楽しめる気がする。

5 ある日、学校の帰り道。
さとるがいつものように

「あつ、おしり！」

と知らない女の人を見て指差して叫んでいた。

さとるのことを知らない女の方は嫌そうな顔して、私とさとるを睨んでいた。

苦しかった……。

知らないから仕方ないとは思うけど、なんで私まで睨むの？

6 帰ってからお母さんに怒った。

「なんでさとるが弟なの!？」

お母さんは顔を真っ赤にして怒った。

「あけみ！　なんてことなの?！」

「だって、さとるのせいで知らない人に睨まれたもん！」

気がついたら私は泣いていた。

「それぐらい、いいじゃない！　さとるのこと知らないんでしょ?！」

「だけど……」

「あけみはお姉ちゃんなんだからさとるを守ってあげて」

お母さんは私をぎゅっと抱きしめてくれた。

安心したけど、辛かった。

7 晩御飯のとき、さとるがご飯中なのにうんちを漏らした。
お母さんがうんちを片付ける。

毎日見る光景だけど、もう私は頭がカンカンだった。

「もうこんな家イヤ！」

私は泣きながら家を飛び出た。

8 家を出て、泣きながら走り続けた。

もう空は暗くなっていて、道路に人は少ない。

いつも遊んでいる公園についた。

『ひこうきこうえん』

ブランコに乗って、遊んでいると小さい頃を思い出し出していた。

「よく小さなさとるをブランコで押してたっけなあ」

さとるのせいで家から逃げたのに、こんなときもさとるのことを考えているんだろ？

9

「ねーねー！」

さとるの声だ。

公園に一人で来たみたい。

ニコニコ笑っている。

人の気もしらないで、この子は。

「さとる、おいでー！」

「うん、ねーね」

私は大きくなったさとるをブランコにのせてあげて、おしてあげた。

10

それからしばらく遊んだあと、私とさとるは公園から出ようとした。

「ねーね、うんち」

さとるは犬のうんちを見つけて、喜んでいた。

嬉しそう、こんなのが何が楽しいのかしら。

でも笑っているさとるは可愛い。

その時だった

キーツ！ と大きな音が聞こえた。

11

トラックがさとるを轢こうとしていた。

私は咄嗟に身体が動いて、さとるを突き飛ばした。

そのあとは覚えてない。

12

目が覚めると病院の中。

何かがおかしかった。

私の脚に感覚がなくなっていたの。

お医者さんが私に言った。

「もうあけみちゃんは歩けないんだ」

私はその日から車いすの生活になった。

13

それからは学校にはお母さんが連れて行ってくれるようになった。車いすになれない私を押してくれるためだよ。

さとりはいつものようにニコニコ笑いながら、一緒に歩いている。なにもわかってないんだろうな、さとりは……。

14

学校につくとお友達たちがみんな私に

「かわいそう、あけみちゃん」

と言って集まってきた。

最初は嬉しかった。

心配してくれてたから。

15

でも、帰り道に小さいな子供に

「ねえ、ママ。あのおねーちゃん車に乗ってるよ。僕も欲しい」

とねだっていたの。

人の気も知らないで。

なによ。

私だって好きで障がい者になったんじゃないのに！

16

「ねーね、こうえん」

さとりが私に声をかけた。

何も知らない顔をしてニコニコ笑っている。

怒っていた自分がバカみたい。

「あのね、ねーねはもうさとりを押せないの」

私がそう言うときさとりは車いすを押してくれた。

「ねーね、こうえん！」

そう言うのと全速力で『ひこうきこうえん』に連れていかれたの。
すっごいスピードでびっくりしたわ。

17

公園につくと、見たことないブランコがあった。

ブランコの前には『だれでもあそべるよ』と書いてあった。

なんだろう？ あのブランコ。

変わったかたちしているわ。

「ねーね、ブランコー！」

さとるは私をブランコに車いすを近づける。

「ちよ、ちよっとさとるー！」

18

ブランコは車いすを収納できるボックスみたいな形をしていた。

このまま乗れるみたい。

私は不思議に思いながら車いすをブランコに乗った。

「ねーね、ブランコ」

「じゃあさとる、おして」

「あんー！」

さとるはニコニコ笑って私を押ししてくれた。

私も自然と笑っていた。

なんか楽しい。

19

「ねーね、ブランコー！」

「うん、ブランコ楽しいね」

「ブランコ！ ブランコ！」

小さなときは私がさとるをおしてたのに、今では私のほうがおさ
れている。

そっか……気がつかなかっただけで、さとるも大きくなっていたん
だね。

「ごめんね、お姉ちゃんが車いすになったから、もうおせないね」

気がつくとも私は涙を流していた。

「ねーね、泣かん」

そう言つて、さとるは自分のハンカチを手渡してくれた。

「ありがとう、あんたもこんな気遣いできるようになっただね」

「ねーね、すき」

さとるはニコニコ笑っていた。

「お姉ちゃんもさとるが大好きだよ」

20

私はさとると同じ障がい者になった。

ただ違うのは私は身体。さとるは頭。

どこかが人よりちよつと違うだけ。

さとるの方が障がい者の先輩。

私の方が後輩なんだよね。

変な目で見られようと、私は負けない。

だってさとるがついているもの！